

子宮頸がんの予防法1

どんな症状がありますか？

子宮頸がんは通常、初期にはほとんど自覚症状がありません。

進行するに従って

- ・異常なおりもの
- ・月経以外の出血(不正出血)
- ・性行為の際の出血
- ・下腹部の痛み
などが現れてきます。

自覚症状がでてからではおそい

子宮頸がんの予防法

子宮頸がんの予防法は2つあります。

- ・子宮頸がん検診
- ・子宮頸がんワクチン接種

子宮頸がん検診とは？

子宮の入り口付近の頸部をブラシなどで擦って細胞を集め、顕微鏡でがん細胞や前がん病変の細胞を見つける細胞診検査を行います。

日本の検診受診率は40%台であり、欧米先進国の70~80%台と比較して低く、特に20歳代を含む若年層の検診受診率は低迷したままとなっています。

出血などの症状がなくても、20歳を過ぎたら、2年に1回の子宮頸がんの検診を受けましょう。

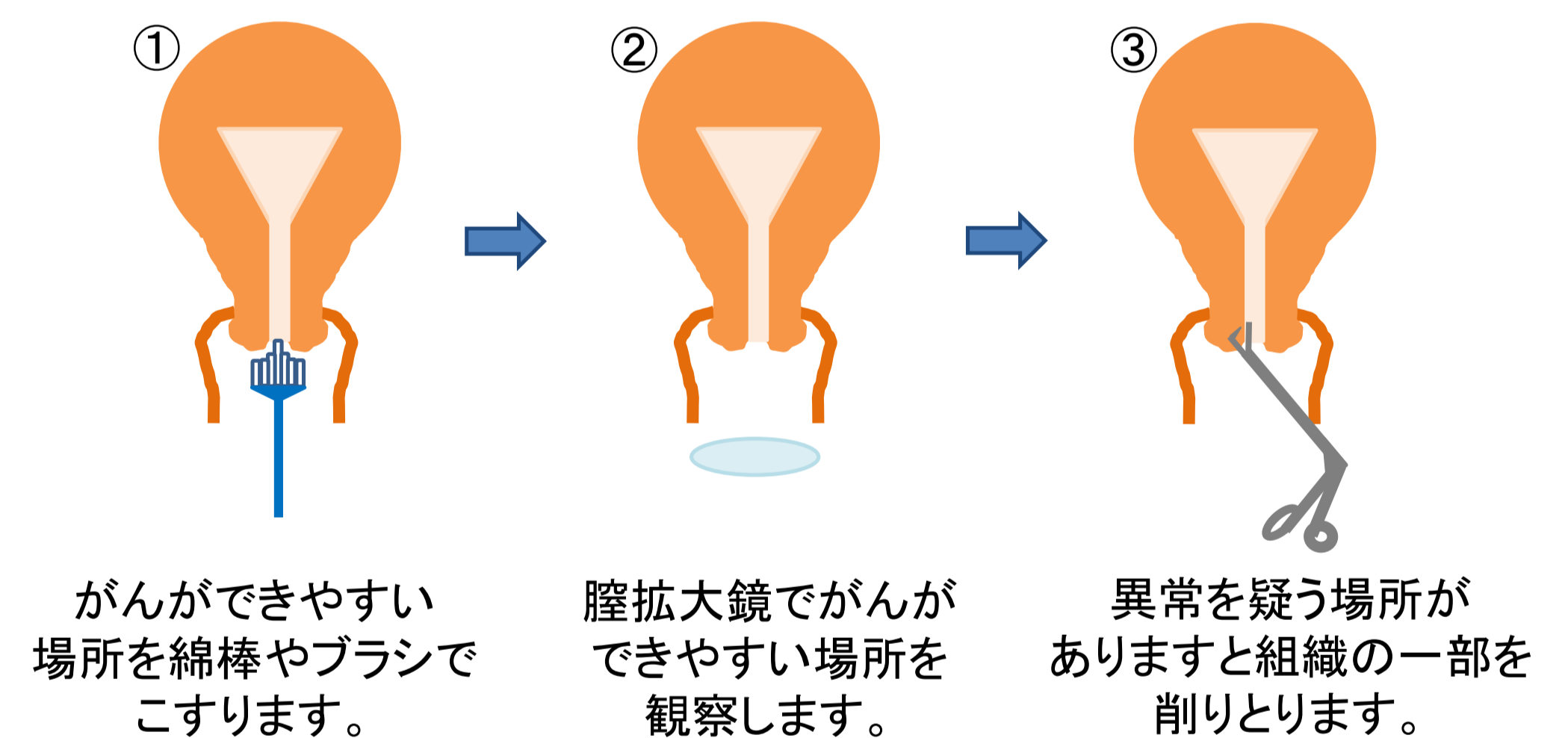
20歳代の検診率が低い

子宮頸癌検診のながれ

- ① 細胞診(検査)
- ② 陰拡大鏡診(検査)(コルポスコプ診ともいいます)
- ③ 組織診(検査)

があります。

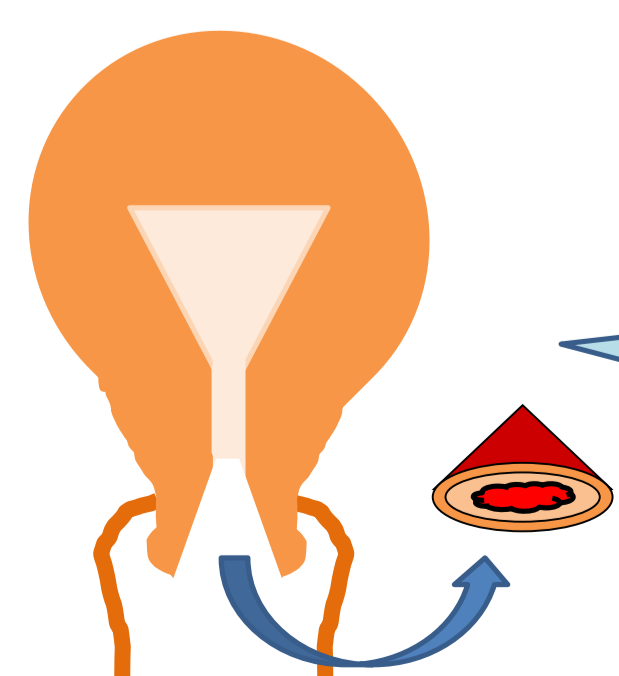
①で要注意以上がでると、②→③と検査がすすむのが普通です。



子宮頸がんの前がん病変、あるいはごく初期の浸潤がん(IA1期)までに発見されれば、子宮頸部円錐切除術による子宮温存も可能ですが、円錐切除術は、その後の妊娠における早産のリスクを高めたり、子宮の入り口(頸管)が細くなったり閉じてしまう可能性などの合併症のリスクを伴います。将来の妊娠・出産に影響が出る可能性があります。したがって、浸潤がんになる前に検診で見つければ、円錐切除を受けて治るので妊娠・出産も問題なく大丈夫といった考え方は適切とは言えません。

そのため、子宮頸がんの根本的な原因となるHPV感染そのものをワクチンで予防することが大切となります。

子宮頸部円錐切除術



前がん病変、あるいはごく初期の浸潤がんでしたら円錐切除術で子宮温存は可能
ただし
早産の危険あり

子宮頸がんの予防法2

子宮頸がん予防ワクチン

HPVの感染を予防することにより子宮頸がんの発症を防ぐワクチンの接種が、各国で広がってきています。性交渉を経験する前の

10歳代前半を中心に接種が推奨されています。

日本でも2012年12月に承認され接種可能となりました。接種は6ヶ月の間に合計3回必要となります。

子宮頸がん予防ワクチン接種後に副反応はありますか？

子宮頸がん予防ワクチン接種後に見られる主な副反応として、
発熱
接種した部位の痛みや腫れ、
注射による痛み、恐怖、興奮などをきっかけとした失神などが挙げられます。

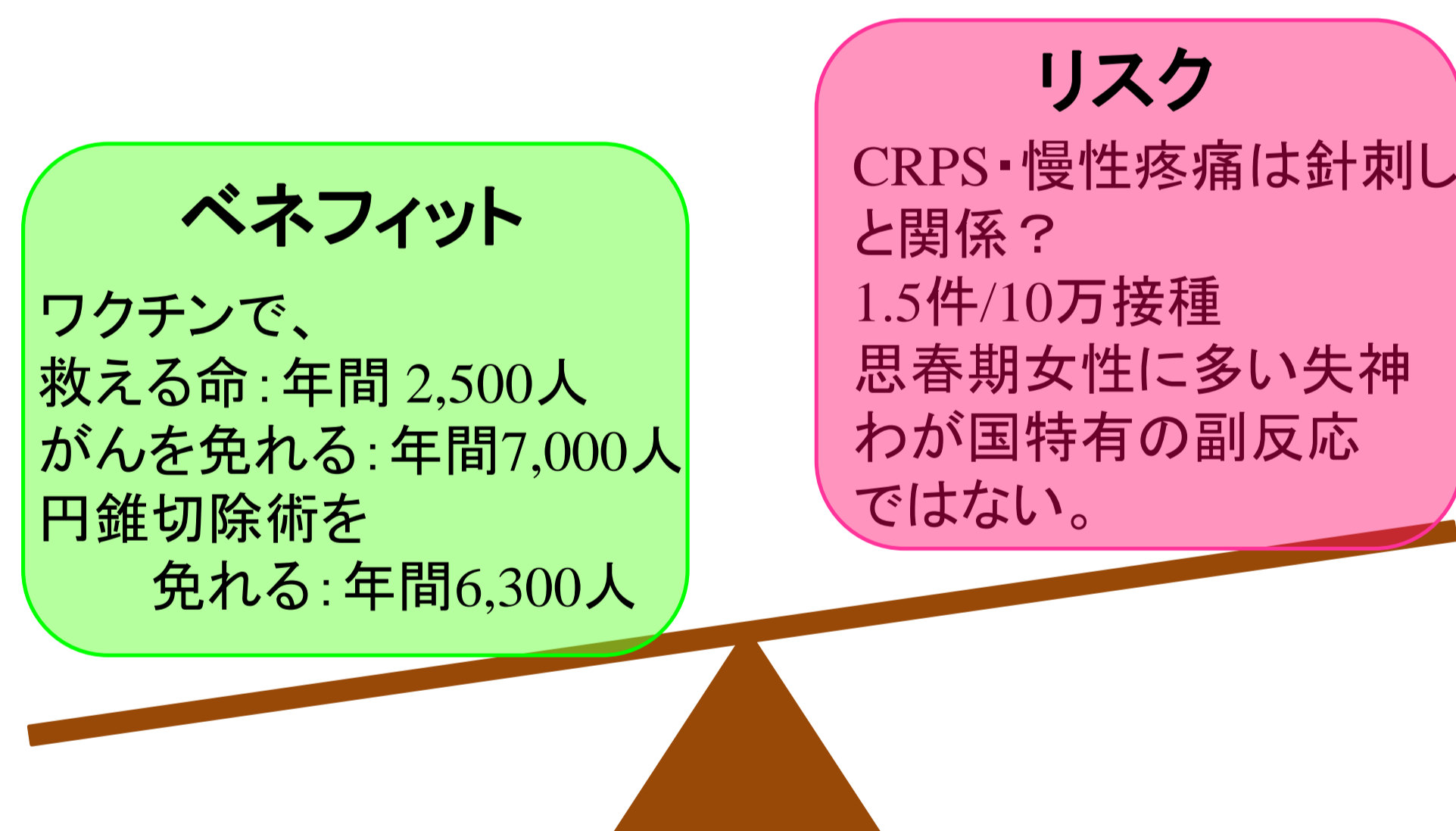
重い副反応の報告

病気の名前	主な症状	報告頻度※
アナフィラキシー	呼吸困難、じんましんなどを症状とする重いアレルギー	約96万接種に1回
ギラン・バレー症候群	両手・足の力の入りにくさなどを症状とする末梢神経の病気	約430万接種に1回
急性散在性脳脊髄炎 (ADEM)	頭痛、嘔吐、意識の低下などを症状とする脳などの神経の病気	約430万接種に1回
複合性局所疼痛症候群 (CRPS)	外傷をきっかけとして慢性の痛みを生ずる原因不明の病気	約860万接種に1回

(※2013年3月までの報告のうちワクチンとの関係が否定できないとされた報告頻度)

重い副反応はまれ

子宮頸がん予防ワクチンのベネフィットとリスク



子宮頸がん副反応
どちらが怖い？

日本でのHPVワクチンの状況

日本では、2013年4月から16型と18型に対するHPVワクチンが定期接種となりました。しかし、わずか2か月で、副反応の疑いが取り沙汰され、政府はHPVワクチンの「積極的な接種勧奨の一時差し控え」を決定しました。現在も「積極的な接種勧奨の一時差し控え」は継続されていますが、公費での無料接種もまた継続されています。これは「接種しないほうがいい」と勧めているわけではなく、「ぜひとも接種を」とお勧めするのを控えている、という状況です。

日本でも、子宮頸がんの90%以上を予防できる9価ワクチンが承認されました。ただし、公費で接種ができる定期接種にはまだなっていません。

まとめ

現在のワクチンで100%予防することはできません。接種時に自然感染しているHPVや子宮頸部病変に対しても治療効果はありません。ワクチンを接種しても定期的な検診は必要です。予防接種にはベネフィット、リスクの二面性があるのは確かですが、てんびんにかけて頂きベネフィットが多いと思われればワクチンを受けましょう。